

# 体育科教育における小学校教諭の意識についての一考察

## —学習指導要領の目標への意識による比較を中心に—

石川 拓次<sup>1</sup>

### 要旨

本研究の目的は、小学校教諭における体育科教育の意識と運動器に関連した用語の認知度および児童の生活習慣への意識と比較をすることにより、今後の体育科教育の充実のあり方について考察することである。対象はA県の小学校教諭714名であった。対象に郵送法による質問紙調査を実施し、231名(31.91%)から回答を得た。調査項目は、体育科教育の意識について、運動器に関する語句の認知について、児童の生活習慣への意識について、自身の運動習慣についてであった。各設問は3～5件法の単一にて回答を求めた。体育科教育の意識の回答を得点化し、全体の平均値から意識の高い群(以下、上位群)と低い群(以下、下位群)に分類し比較検討を行った。統計方法は、t検定およびマンホイニ検定を用いた。有意水準は5%未満とした。運動器に関する用語の認知について、上位群は下位群と比較して得点が高かった( $p < 0.001$ )。また、各用語においても、多くの用語にて上位群の方が認知されていた( $p < 0.05 \sim 0.001$ )。児童の生活習慣に関して、「骨折する児童が多い」、「運動する児童としない児童の二極化が目立つ」、「睡眠時間が少ない児童が多い」および「朝食を欠食する児童が多い」の設問で上位群が下位群の方より意識されていた( $p < 0.05 \sim 0.001$ )。以上の結果より、体育科教育を充実させるためには、運動器に関する認知を高め、児童の身体活動を中心とした健康に関する認識を高めることにより、教諭自身および児童の健康観を形成していくことが必要であると考えられる。

キーワード 小学校学習指導要領 体育科教育 運動器 生活習慣 健康観

### 1. 緒言

現在の子どもの健康課題は多様化・複雑化している。その中の一つとして、身体活動・スポーツ実施の二極化があげられている。文部科学省の調査では、中学生において、男子では6.4%、女子では全体の1/5に近い19.4%が1週間の総運動時間が60分未満であると報告されている。さらに1週間の中学生の総運動時間は、300分前後を底としたU字を描き、総運動時間が900分前後を頂点とした分布が見られ、運動実施の二極化が顕著であると述べられている[西嶋, 2018: 4-10]。その中で運動しない子どもについては、体力・運動能力の低下や肥満等による生活習慣病の発症の危険性が高まるという課題があり[津島ほか, 2017: 41-47][津川ほか, 2008: 9-25]、一方で、運動する子の中には運動過多によるバーンアウトや運動器疾患の発生が大きな問題となっている。

学齢期の子どもにおいて、身体活動時間を確保する方法として、学校における体育科の授業があげられる。平成29年に文部科学省から新たな学習指導要領[文部科学省,

<sup>1</sup> 短期大学部こども学専攻

2017：142-155]<sup>4)</sup>が告示され、来年度完全に実施される。小学校の体育科においては、前回の平成20年の学習指導要領から目標が大きく変更された。すなわち、主体的、対話的で深い学びを推進することにより、生涯にわたる健康の保持増進のために豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することが新たに記載され、体育科の授業においても主体的、対話的で深い学び（アクティブラーニング）を推進の必要性が増している。また、体育科の授業時間数は小学校においては、1年生から4年生については、週当たり3時間、5年生および6年生については、週当たり2.6時間となっており、4年生までは、前回の学習指導要領から増加され、特に低学年において身体活動時間の確保という観点も取り入れられている。

小学校の学習指導要領の体育科において育成される資質・能力として、各種の運動を行うことにより基本的な動きや技能を身につける、運動についての自己課題の発見と解決するための思考力および判断力、そして、健康および体力を保持増進し、楽しく明るい生活を営む態度があげられており、さらに学年ごとに目標や内容が示されて、体育科の授業は進められている[文部科学省，2017：142-155]。各学年の目標を概観すると、運動の楽しさを味わう、基本的な動きを身につける、考えたことを他者に伝える、意欲的に運動し、自己の健康を保持増進する態度を養う等が示されている。これらの目標から小学校の体育科教育においては、子ども達が生涯スポーツを楽しんで行うことができる基礎を培うことが大切であることがわかる。

一方で、小学校教諭は多くの場合、1クラスを担当し、そのクラスのほぼすべての授業を担当することとなるため、実技を伴う体育科は教諭における得手、不得手が指導に大きく影響する科目であるということも言える。清水ほかは、器械体操において、4種目（鉄棒・跳び箱・平均台・マット）すべてがやや不得意・不得意であると回答した教員が16.5%であったと報告している[清水ほか，2019：107-116]。また、雪吹ほかは、小学校教諭を目指す学生を対象として、教職課程コアカリキュラムの観点理解度を調査し、体育・スポーツの得意不得意により観点理解度に差が見られたと報告している。その結果より、体育科教育法を学ぶ前段階として身体活動・スポーツは楽しいなど好きになる取り組みが行われ、身体活動・スポーツ好きを教員養成課程においても育てることができれば、体育科の理解度を少しでも高くすることができる可能性があるとして述べている[雪吹ほか，2018：101-109]。また、小学校教諭においては、保健に関する専門知識や技能、指導力の不足も指摘されている[山田ほか，2014：105-113]。さらに山平ほかの調査においても、教諭自身の健康や子どもたちの健康に対する関心、保健室の薬品についての知識、疾病・ケガへの応急処置に関する知識など、一般教諭の保健に対する意識も53%と低いと報告されている[山平ほか，1978：217-233]。体育科の指導をするうえでも運動器に関する専門的な知識や児童における健康に対する関心についての認知が必要であると考えられる。

以上のことから、新しい小学校学習指導要領における体育科教育の全体および学年別の目標を踏まえながら、小学校教諭における体育科教育の意識を運動器に関連した知識および児童の生活習慣への意識との比較をすることにより、今後の体育科教育の充実のあり方について考察することとした。

## 2. 目的

本研究の目的は、平成29年告示の小学校学習指導要領における体育科教育の全体および学年別の目標を踏まえながら、小学校教諭における体育科教育の意識と運動器に関連した用語の認知度および児童の生活習慣への意識と比較をすることにより、今後の体育科教育の充実のあり方について考察することである。

## 3. 方法

### 3.1. 対象

A県の公立小学校全362校の小学校教諭を対象とした。各学校にて2名ずつ抽出し、回答者とした。回収数（回収率）は、231件（31.91%）であった。回収された質問紙より体育科の教育の意識についての回答に不備があったものを除外し、224件を分析対象とした。対象者の特性および勤務校の概要について表1・2に示した。

表1. 対象者の特性

	男性	女性	その他			未回答	総計	
性別	62	159	0			3	224	
	27.7%	71.0%	0.0%			1.3%	100.0%	
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	未回答	総計	
年齢	57	41	45	75	3	3	224	
	25.4%	18.3%	20.1%	33.5%	1.3%	1.3%	100.0%	
	1種免許	2種免許	専修免許				未回答	総計
教員免許	195	17	6				6	224
	87.1%	7.6%	2.7%				2.7%	100.0%
	5年未満	6年～10年	11年～20年	20年～30年	30年以上	未回答	総計	
勤務年数	59	30	39	49	44	3	224	
	26.3%	13.4%	17.4%	21.9%	19.6%	1.3%	100.0%	

表2. 勤務校の児童数

100名以下	101～200名	201～300名	301～400名	401～500名	501～600名	601～700名	701名以上	不明	総計
57	48	40	34	15	8	4	13	5	224
25.4%	21.4%	17.9%	15.2%	6.7%	3.6%	1.8%	5.8%	2.2%	100.0%

### 3.2. 調査方法および調査内容

対象に対して、郵送法による自記式の質問紙調査を実施した。設問内容を表3に示した。設問内容は、運動器という語句の認知、運動器に関する情報源、運動器疾患に対する対応について、体育科教育の意識について、そして、運動器・運動器疾患に関連する語句の認知についてであった。

運動器に関する語句の認知の設問については、臨床スポーツ用語集から複数の識者により学齢期に関連ある運動器疾患、身体、身体活動およびスポーツ医学に関する語句を抽出し、15項目を設定した[日本臨床スポーツ医学会, 2008]。また、体育科教育の意識については、小学校学習指導要領（平成29年告示）[文部科学省, 2017: 142-155]の第2章各教

科 第9節 体育の全体および各学年別の目標から設問を作成した。

各設問について、3～5件法の単一もしくは複数にて回答を求めた。

表3. 設問一覧

大設問	中設問	小設問
体育授業意識		体育の授業においては運動することの楽しさを伝えたいと思う 体育の授業においては苦手なことにも挑戦することも大切だと思う 体育の授業においては体力の向上を目的に行っている 体育の授業においては、様々な基本的な体の動きを身に付けることを目的に行っている 子ども達が生涯にわたって運動やスポーツに親しむことが出来ることを考えて体育の授業を行っている 体育の授業では、授業の始めに授業の目標(目当て・ねらい)を示している。 体育の授業では、授業の最後に今日学んだ内容をふり返る活動を行っている。 体育の授業では、友達と助け合ったり、役割を果たすような活動を行っている。 体育の授業では、友達同士やチームの中で話し合う活動を行っている。 体育の授業では、友達と協力して課題を解決する活動を行っている。
運動器意識	運動器に関する設問群	骨折する児童が多い 運動する児童としない児童の二極化が目立つ からだの柔軟性が低い児童が多い 肥満傾向のある児童が多い 痩せ傾向のある児童が多い 児童の日常的な身体活動(歩く・階段を使う等)が少ない
	生活習慣に関する設問	睡眠時間が少ない児童が多い 朝食を欠食する児童が多い 加工食品を食べている児童が多い ダイエット(食事制限)をしている児童が多い
運動器・運動器疾患用語の認知	運動器および運動器疾患に関する用語	疲労骨折 Osgood-Schlatter病(オスグッド病) 野球肘 骨端線
	身体活動に関する用語	関節弛緩性テスト 等尺性筋カトレーニング
	スポーツ医学に関する用語	RICE処置(ライス処置) 湿潤療法
運動についての意識	小学校期の身体活動に関する設問	子どもの頃、運動(スポーツ)をするのが好きであった。 子どもの頃、室内で遊ぶよりも室外で遊ぶことが多かった。
	現在の身体活動に関する設問	日常的に歩くことや階段を使うことを意識している。 同じ年代の人と比べて体力には自信がある。 自分自身の健康について気をつけている。

### 3.3. 分析方法

体育科教育法の意識の回答から上位群と下位群に分類し、比較検討を行った。群分けの方法を以下に示す。体育教育法の意識の項目についての回答をとともそう思う：4点、以下の回答から1点ずつ減点し、合計得点を算出した。この合計得点を体育教育法の意識の総合得点とした。全体の総合得点の平均を算出し、平均得点以上を上位群、平均得点以下を下位群に分類した。各設問について、ノンパラメトリック検定のマン・ホイットニの順位検定を行った。有意水準は5%未満とした。

### 3.4. 倫理的配慮

本研究を行うに際して、対象者に対して調査の意義と人権的配慮に関して十分に文書による説明を行なった上で同意を得た。質問紙調査の実施にあたっては、個人情報の保護が確保され、提出を拒否できること、拒否しても何ら不利益を受けないことを明記した。回収については、各自で封をした上で郵送させた。なお、解析に用いたデータは、入手した時点で個人を識別できる情報のすべてが取り除かれ、新たな番号を付して、連結不可能にして、匿名化した。

## 4. 結果

### 4.1. 体育科教育の意識について

体育科教育の意識についての結果を表4に示した。肯定的な意見（とてもそう思うとまあそう思うの合計）が90%以上であった項目として、「体育の授業においては運動することの楽しさを伝えたいと思う」、「体育の授業においては苦手なことにも挑戦することも大切だと思う」、そして、「体育の授業においては、様々な基本的な体の動きを身に付けることを目的に行っている」であった。一方、肯定的な意見が70%以下であった項目として、「体育の授業では、授業の最後に今日学んだ内容をふり返る活動を行っている」および「体育の授業では、友達と協力して課題を解決する活動を行っている」であった。

表4. 体育科教育の意識について

設問	とてもそう 思う	まあそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	総計
体育の授業においては運動することの楽しさを伝えたいと思う	162 72.3%	60 26.8%	2 0.9%	0 0.0%	0 0.0%	224 100.0%
体育の授業においては苦手なことにも挑戦することも大切だと思う	123 54.9%	93 41.5%	7 3.1%	1 0.4%	0 0.0%	224 100.0%
体育の授業においては体力の向上を目的に行っている	72 32.1%	122 54.5%	26 11.6%	4 1.8%	0 0.0%	224 100.0%
体育の授業においては、様々な基本的な体の動きを身に付けることを目的に行っている	97 43.3%	113 50.4%	11 4.9%	3 1.3%	0 0.0%	224 100.0%
子ども達が生涯にわたって運動やスポーツに親しむことが出来ることを考えて体育の授業を行う	78 34.8%	100 44.6%	42 18.8%	4 1.8%	0 0.0%	224 100.0%
体育の授業では、授業の始めに授業の目標(目当て・ねらい)を示している。	60 26.8%	109 48.7%	45 20.1%	8 3.6%	2 0.9%	224 100.0%
体育の授業では、授業の最後に今日学んだ内容をふり返る活動を行っている。	35 15.6%	109 48.7%	63 28.1%	14 6.3%	3 1.3%	224 100.0%
体育の授業では、友達と助け合ったり、役割を果たすような活動を行っている。	55 24.6%	145 64.7%	20 8.9%	4 1.8%	0 0.0%	224 100.0%
体育の授業では、友達同士やチームの中で話し合う活動を行っている。	45 20.1%	116 51.8%	47 21.0%	15 6.7%	1 0.4%	224 100.0%
体育の授業では、友達と協力して課題を解決する活動を行っている。	39 17.4%	105 46.9%	58 25.9%	19 8.5%	3 1.3%	224 100.0%

### 4.2. 体育科教育の意識による分類との比較

#### 4.2.1. 知識による比較

体育科教育の意識による分類における運動器および運動器疾患に関する用語の認知の総合得点の結果を図1に示した。総合得点において、上位群 $28.6 \pm 8.5$ 、下位群 $24.3 \pm 6.4$ であり、有意差がみられた ( $p < 0.001$ )。

体育科教育の意識による分類における運動器および運動器疾患に関する用語の認知によって比較検討した結果を表5-1~3に示した。運動器および運動器疾患に関わる用語について、「疲労骨折」、「膝蓋靭帯炎」、「オスグッドシュッラッター病」、「野球肘」、「若木骨折」、そして、「骨端線」において、上位群が下位群より有意に認知していた ( $p < 0.05 \sim 0.001$ )。また、身体活動に関する用語について、「等尺性筋力トレーニング」および「スタティックストレッチ」において、上位群が下位群より有意に認知していた ( $p < 0.05 \sim 0.005$ )。スポーツ医科学に関する用語については、有意差はみられなかった。

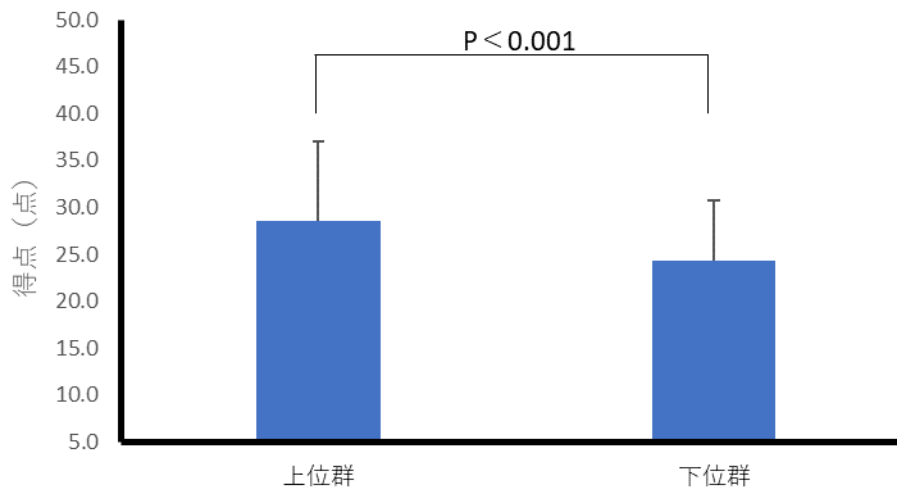


図1. 運動器に関連した用語の認知の総合得点による比較

表5-1. 体育科教育の意識による用語の認知の比較(運動器・運動器疾患)

項目	群	よく知っている	知っている	聞いたことがある	知らない	総計	マン・ホイットニの順位
疲労骨折	上位群	48 47.1%	49 48.0%	5 4.9%	0 0.0%	102 100.0%	***
	下位群	25 21.9%	69 60.5%	15 13.2%	5 4.4%	114 100.0%	
	総計	73 33.8%	118 54.6%	20 9.3%	5 2.3%	216 100.0%	
Jumper's Knee(ジャンパー膝: 膝蓋腱炎)	上位群	6 5.9%	20 19.8%	30 29.7%	45 44.6%	101 100.0%	**
	下位群	3 2.7%	12 10.6%	26 23.0%	72 63.7%	113 100.0%	
	総計	9 4.2%	32 15.0%	56 26.2%	117 54.7%	214 100.0%	
Osgood-Schlatter病(オスグッド病)	上位群	20 19.6%	18 17.6%	19 18.6%	45 44.1%	102 100.0%	*
	下位群	6 5.3%	24 21.2%	17 15.0%	66 58.4%	113 100.0%	
	総計	26 12.1%	42 19.5%	36 16.7%	111 51.6%	215 100.0%	
腰椎分離症	上位群	9 8.9%	19 18.8%	26 25.7%	47 46.5%	101 100.0%	n.s.
	下位群	3 2.7%	11 9.7%	44 38.9%	55 48.7%	113 100.0%	
	総計	12 5.6%	30 14.0%	70 32.7%	102 47.7%	214 100.0%	
野球肘	上位群	29 28.4%	43 42.2%	21 20.6%	9 8.8%	102 100.0%	***
	下位群	6 5.3%	53 46.5%	32 28.1%	23 20.2%	114 100.0%	
	総計	35 16.2%	96 44.4%	53 24.5%	32 14.8%	216 100.0%	

項目	群	よく知っている	知っている	聞いたことがある	知らない	総計	マン・ホイットニの順位
若木骨折	上位群	5 5.0%	22 21.8%	28 27.7%	46 45.5%	101 100.0%	**
	下位群	2 1.8%	10 8.8%	29 25.7%	72 63.7%	113 100.0%	
	総計	7 3.3%	32 15.0%	57 26.6%	118 55.1%	214 100.0%	
骨端線	上位群	5 5.0%	9 8.9%	22 21.8%	65 64.4%	101 100.0%	*
	下位群	0 0.0%	4 3.5%	20 17.7%	89 78.8%	113 100.0%	
	総計	5 2.3%	13 6.1%	42 19.6%	154 72.0%	214 100.0%	
マルアライメント	上位群	1 1.0%	2 2.0%	22 21.8%	76 75.2%	101 100.0%	n.s.
	下位群	0 0.0%	0 0.0%	14 12.4%	99 87.6%	113 100.0%	
	総計	1 0.5%	2 0.9%	36 16.8%	175 81.8%	214 100.0%	

\*\*\* : p<0.001  
 \*\* : p<0.01  
 \* : p<0.05  
 n.s. : not significant

表5-2. 体育科教育の意識による用語の認知の比較(身体活動)

項目	群	よく知っている	知っている	聞いたことがある	知らない	総計	マン・ホイットニの順位
関節弛緩性テスト	上位群	1 1.0%	11 10.9%	27 26.7%	62 61.4%	101 100.0%	n.s.
	下位群	0 0.0%	4 3.5%	25 22.1%	84 74.3%	113 100.0%	
	総計	1 0.5%	15 7.0%	52 24.3%	146 68.2%	214 100.0%	
タイトネス	上位群	0 0.0%	6 5.9%	16 15.8%	79 78.2%	101 100.0%	n.s.
	下位群	0 0.0%	1 0.9%	13 11.5%	99 87.6%	113 100.0%	
	総計	0 0.0%	7 3.3%	29 13.6%	178 83.2%	214 100.0%	
等尺性筋カトレニング	上位群	4 4.0%	7 6.9%	23 22.8%	67 66.3%	101 100.0%	*
	下位群	2 1.8%	3 2.7%	16 14.2%	92 81.4%	113 100.0%	
	総計	6 2.8%	10 4.7%	39 18.2%	159 74.3%	214 100.0%	
スタティックストレッチ(静的ストレッチ)	上位群	12 11.9%	16 15.8%	30 29.7%	43 42.6%	101 100.0%	**
	下位群	6 5.3%	14 12.4%	21 18.6%	72 63.7%	113 100.0%	
	総計	18 8.4%	30 14.0%	51 23.8%	115 53.7%	214 100.0%	

\*\* : p<0.01  
 \* : p<0.05  
 n.s. : not significant

表5-3. 体育科教育の意識による用語の認知の比較(スポーツ医科学)

項目	群	よく知っている	知っている	聞いたことがある	知らない	総計	マン・ホイットニの順位
RICE処置 (ライス処置)	上位群	13 12.9%	14 13.9%	17 16.8%	57 56.4%	101 100.0%	n.s.
	下位群	7 6.2%	15 13.3%	17 15.0%	74 65.5%	113 100.0%	
	総計	20 9.3%	29 13.6%	34 15.9%	131 61.2%	214 100.0%	
ドーピング コントロール	上位群	5 4.9%	15 14.7%	33 32.4%	49 48.0%	102 100.0%	n.s.
	下位群	1 0.9%	16 14.2%	41 36.3%	55 48.7%	113 100.0%	
	総計	6 2.8%	31 14.4%	74 34.4%	104 48.4%	215 100.0%	
湿潤療法	上位群	9 8.8%	20 19.6%	23 22.5%	50 49.0%	102 100.0%	n.s.
	下位群	2 1.8%	13 11.5%	39 34.5%	59 52.2%	113 100.0%	
	総計	11 5.1%	33 15.3%	62 28.8%	109 50.7%	215 100.0%	

n.s. : not significant

#### 4.2.2. 児童の運動器に関する意識による比較

体育科教育の意識による分類における児童の運動器に関する意識の比較を表6に示した。「骨折する児童が多い」および「運動する児童としない児童の二極化が目立つ」において、上位群が下位群より有意に認識していた ( $p < 0.05 \sim 0.001$ )。

表6. 体育科教育法の意識による児童の運動器に関する意識の比較

設問	群	とてもそう思う	まあそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	全くそう思わない	総計	マン・ホイットニの順位
骨折する児童が多い	上位群	10 9.5%	33 31.4%	23 21.9%	32 30.5%	7 6.7%	105 100.0%	*
	下位群	1 0.9%	32 27.4%	31 26.5%	42 35.9%	11 9.4%	117 100.0%	
	総計	11 5.0%	65 29.3%	54 24.3%	74 33.3%	18 8.1%	222 100.0%	
運動する児童としない児童の二極化が目立つ	上位群	45 42.9%	43 41.0%	6 5.7%	10 9.5%	1 1.0%	105 100.0%	**
	下位群	22 18.5%	71 59.7%	20 16.8%	6 5.0%	0 0.0%	119 100.0%	
	総計	67 29.9%	114 50.9%	26 11.6%	16 7.1%	1 0.4%	224 100.0%	
からだの柔軟性が低い児童が多い	上位群	37 35.2%	43 41.0%	16 15.2%	9 8.6%	0 0.0%	105 100.0%	n.s.
	下位群	22 18.5%	69 58.0%	19 16.0%	8 6.7%	1 0.8%	119 100.0%	
	総計	59 26.3%	112 50.0%	35 15.6%	17 7.6%	1 0.4%	224 100.0%	
肥満傾向のある児童が多い	上位群	4 3.8%	29 27.6%	47 44.8%	23 21.9%	2 1.9%	105 100.0%	n.s.
	下位群	2 1.7%	23 19.3%	55 46.2%	36 30.3%	3 2.5%	119 100.0%	
	総計	6 2.7%	52 23.2%	102 45.5%	59 26.3%	5 2.2%	224 100.0%	



設問	群	とてもそう 思う	まあそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	総計	マン・ホイット ニの順位
痩せ傾向の ある児童が 多い	上位群	5 4.8%	21 20.0%	53 50.5%	25 23.8%	1 1.0%	105 100.0%	n.s.
	下位群	2 1.7%	20 16.8%	67 56.3%	29 24.4%	1 0.8%	119 100.0%	
	総計	7 3.1%	41 18.3%	120 53.6%	54 24.1%	2 0.9%	224 100.0%	
児童の日常 的な身体活 動(歩く・階段 を使う等)が 少ない	上位群	15 14.3%	39 37.1%	32 30.5%	16 15.2%	3 2.9%	105 100.0%	n.s.
	下位群	2 1.7%	53 44.9%	34 28.8%	28 23.7%	1 0.8%	118 100.0%	
	総計	17 7.6%	92 41.3%	66 29.6%	44 19.7%	4 1.8%	223 100.0%	

\*\* : p<0.01  
 \* : p<0.05  
 n.s. : not significant

#### 4.2.3. 児童の生活習慣に関する意識による比較

体育科教育の意識による分類における児童の生活習慣に関する意識の比較を表7に示した。「睡眠時間が少ない児童が多い」および「朝食を欠食する児童が多い」において、上位群が下位群より有意に認識していた (p<0.05~0.005)。

表7. 体育科教育法の意識による児童の生活習慣に関する意識の比較

設問	群	とてもそう 思う	まあそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	総計	マン・ホイット ニの順位
睡眠時間が 少ない児童 が多い	上位群	24 22.9%	44 41.9%	20 19.0%	17 16.2%	0 0.0%	105 100.0%	*
	下位群	10 8.4%	54 45.4%	36 30.3%	19 16.0%	0 0.0%	119 100.0%	
	総計	34 15.2%	98 43.8%	56 25.0%	36 16.1%	0 0.0%	224 100.0%	
朝食を欠食 する児童が 多い	上位群	6 5.7%	30 28.6%	29 27.6%	35 33.3%	5 4.8%	105 100.0%	**
	下位群	3 2.5%	21 17.6%	30 25.2%	53 44.5%	12 10.1%	119 100.0%	
	総計	9 4.0%	51 22.8%	59 26.3%	88 39.3%	17 7.6%	224 100.0%	
加工食品を 食べている 児童が多い	上位群	27 25.7%	36 34.3%	38 36.2%	4 3.8%	0 0.0%	105 100.0%	n.s.
	下位群	9 7.6%	62 52.1%	36 30.3%	11 9.2%	1 0.8%	119 100.0%	
	総計	36 16.1%	98 43.8%	74 33.0%	15 6.7%	1 0.4%	224 100.0%	
ダイエット(食 事制限)をし ている児童 が多い	上位群	1 1.0%	8 7.6%	32 30.5%	40 38.1%	24 22.9%	105 100.0%	n.s.
	下位群	0 0.0%	6 5.0%	27 22.7%	56 47.1%	30 25.2%	119 100.0%	
	総計	1 0.4%	14 6.3%	59 26.3%	96 42.9%	54 24.1%	224 100.0%	

\*\* : p<0.01  
 \* : p<0.05  
 n.s. : not significant

#### 4.2.4. 身体活動に関する意識による比較

体育科教育の意識による分類における自身の身体活動に関する意識の総合得点の結果を図2に示した。総合得点において、上位群19.6±3.6、下位群17.5±3.5であり、有意差がみられた (p<0.001)。

体育科教育の意識による分類における自身の小学校期の身体活動に関する意識の比較を表8-1～2に示した。「子どもの頃、運動（スポーツ）をするのが好きであった」および「子どもの頃、室内で遊ぶよりも室外で遊ぶことが多かった」において、上位群が下位群より有意に肯定的であった（ $p < 0.05 \sim 0.005$ ）。

体育科教育の意識による分類における自身の現在の身体活動に関する意識の比較を表に示した。「日常的に歩くことや階段を使うことを意識している」、「同じ年代の人と比べて体力には自信がある」および「自分自身の健康について気をつけている」において、上位群が下位群より有意に肯定的であった（ $p < 0.05 \sim 0.01$ ）。

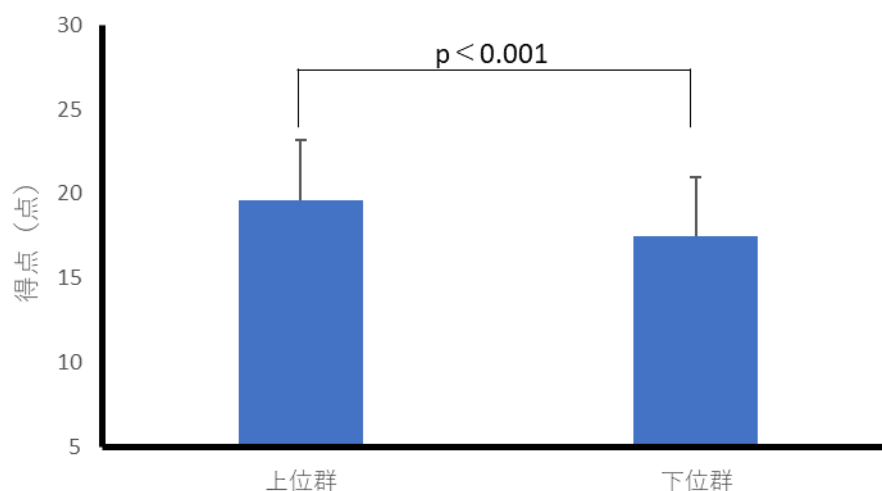


図2.身体活動に関する意識の総合得点による比較

表8-1. 体育科教育法の意識による自身の小学校期の身体活動に関する意識の比較

設問	群	とてもそう 思う	まあそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	総計	マン・ホイットニの順位
子どもの頃、運動（スポーツ）をするのが好きであった。	上位群	55 52.4%	30 28.6%	11 10.5%	7 6.7%	2 1.9%	105 100.0%	**
	下位群	40 33.6%	41 34.5%	15 12.6%	16 13.4%	7 5.9%	119 100.0%	
	総計	95 42.4%	71 31.7%	26 11.6%	23 10.3%	9 4.0%	224 100.0%	
子どもの頃、室内で遊ぶよりも室外で遊ぶことが多かった。	上位群	59 56.2%	26 24.8%	12 11.4%	5 4.8%	3 2.9%	105 100.0%	***
	下位群	31 26.1%	49 41.2%	19 16.0%	16 13.4%	4 3.4%	119 100.0%	
	総計	90 40.2%	75 33.5%	31 13.8%	21 9.4%	7 3.1%	224 100.0%	

\*\*\* :  $p < 0.001$   
 \*\* :  $p < 0.01$   
 n.s. : not significant

表8-2. 体育科教育法の意識による自身の現在の身体活動に関する意識の比較

設問	群	とてもそう 思う	まあそう 思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	総計	マン・ホイットニの順位
日常的に歩くことや階段を使うことを意識している。	上位群	32 30.5%	34 32.4%	27 25.7%	8 7.6%	4 3.8%	105 100.0%	
	下位群	15 12.6%	45 37.8%	36 30.3%	19 16.0%	4 3.4%	119 100.0%	**
	総計	47 21.0%	79 35.3%	63 28.1%	27 12.1%	8 3.6%	224 100.0%	
同じ年代の人と比べて体力には自信がある。	上位群	22 21.0%	29 27.6%	34 32.4%	18 17.1%	2 1.9%	105 100.0%	
	下位群	9 7.6%	33 27.7%	45 37.8%	24 20.2%	8 6.7%	119 100.0%	*
	総計	31 13.8%	62 27.7%	79 35.3%	42 18.8%	10 4.5%	224 100.0%	
自分自身の健康について気をつけている。	上位群	23 21.9%	51 48.6%	22 21.0%	8 7.6%	1 1.0%	105 100.0%	
	下位群	13 10.9%	51 42.9%	39 32.8%	12 10.1%	4 3.4%	119 100.0%	**
	総計	36 16.1%	102 45.5%	61 27.2%	20 8.9%	5 2.2%	224 100.0%	

\*\* : p<0.01  
\* : p<0.05  
n.s. : not significant

## 5. 考察

### 5.1. 体育科教育の意識について

平成29年に告示された小学校学習指導要領の体育の目標として、「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す」とされている[文部科学省, 2017: 142-155]。

その中で前回の学習指導要領の目標から変更追加された点は大きく2つある。1つ目は、課題解決学習の視点が入ったこと、そして、2つ目は、前回までは「明るく楽しい生活を営む態度」であったのが、「豊かなスポーツライフを実現する」に変更されているということである。1つ目の課題解決学習の視点については、今回の学習指導要領の大きな柱である「主体的で対話的な深い学び（アクティブラーニング）」を実現するための一つの方策として課題解決学習があげられており、体育においても自ら課題を発見し、解決する能力を育むということが重視されていると考えられる。2つ目については、具体的にスポーツという言葉を用いて、生涯に渡ってスポーツをする基盤を形成することに重点が置かれている。

そこで、今回体育科教育における小学校教諭の意識について調査を行った。その結果、多くの小学校教員が、運動することの楽しさ、苦手なことへの挑戦、様々な基本的な体の動きを身に付けることに留意して授業を実施していることがわかった。一方スポーツ庁が実施した調査では、小学校5年生で運動・スポーツがややきらい・きらいを合わせた割合は男子6.6%、女子12.3%であったと報告されている[スポーツ庁, 2016]。豊かなスポーツライフを実現するためには幼児期・児童期から運動有能感を高め、運動が楽しくて好きであるということを実感させることが大切である。また、小学校低学年までの時期はスキヤモンの発育発達曲線で示されている通り、神経型の発育が著しい時期であり、その時期

に様々な運動を行うことにより、運動や日常生活に必要な体の動きを身につけることが可能となる。以上のことから、本調査の結果から示されている通り、小学校の体育の授業において、運動有能感を高めること、運動の楽しさを伝えること、そして、様々な運動を行うことが小学校教諭としての重要な役割の一つであると考えられる。

一方で、授業の終わりにおける振り返りの活動および課題を解決する活動については、実施しているという回答が少なかった。中央教育審議会の初等中等分科会の新しい学習指導要領が目指す姿の中で、学びを通じた子供たちの真の理解、深い理解を促すためには、主題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行い、試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を行い、その上で自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげるといふ、深い学習のプロセスが重要であると述べられている[文部科学省, 2015]。このことから、体育科教育においても課題解決学習を取り入れ、児童が自身の課題を認識し、その克服を目指すための学習過程を実施していくことが必要であると考えられる。

## 5.2. 体育科教育の意識による分類との比較について

体育科教育の意識による分類による比較の結果についてまとめると以下のようになる。

1. 体育科教育の意識の上位群は下位群と比較して有意に用語を認識していた。また、それぞれの用語については、運動器・運動器疾患および身体活動に関する用語の多くで、有意に上位群の方が下位群よりも認識されていた。
2. 用語についての認識は全体的に低いものが多かった。
3. 児童に対しての運動器を中心とした健康についての認識については、骨折の増加と運動の実施の二極化にて有意差がみられた。
4. 児童に対しての生活習慣についての認識については、睡眠時間の減少と朝食摂取の有無で有意差がみられた。
5. 身体活動に関する設問については、すべての項目で上位群と下位群を比較して有意に上位群が高かった。

この結果を踏まえて考察をしていく。

体育科教育の意識により、運動器や運動器疾患、身体活動に関する用語についての認識に差異があったことの要因は、体育科教育において小学校教諭自身の身体活動やスポーツについての関心および教諭自身および児童に対しての健康観が影響していることが考えられる。本調査の結果からも、自身の幼少期および現在の身体活動に関する意識において、すべての項目において上位群と下位群で有意差がみられた。すなわち、幼少期からの運動に関して興味関心や現在の身体活動の実施や健康への留意が身体活動・スポーツへの興味関心へと繋がり、運動器や身体活動に関連した用語の認知にも影響を与えていることが考えられる。また、全体的に小学校教諭において運動器や身体活動についての用語の認知が低かった要因としては、教員養成課程や教職についての研修等への参加の影響が考えられる。筆者は、養護教諭、体育科教諭、一般教諭を対象に運動器および身体活動についての認知について調査を行った。その結果、養護教諭は児童の身体的な発育発達に関する用語についての認知が高く、体育科教諭は、身体運動やスポーツに関する用語の認知

が高く、そして、一般教諭は全体的に認知が低かった[石川, 2018 : 17-28]。一般教員が児童の発育発達や身体運動の用語に関する認知が低かった要因の一つとして、「学校保健」を教員養成課程で学ぶことがないこと<sup>(註1)</sup>が考えられる。小学校教諭についても同様であり、養成課程および教職についてからの研修等で児童の健康に関する事項を学び、自身および児童に対しての健康観（健康についての考え方）を形成する必要があると考えられる。さらに、平成28年度からは児童の定期健康診断において「四肢の状態」が追加されており[文部科学省, 2014]、これを契機に児童の身体的な課題についても小学校教諭が学ぶことが体育科教育を改善していく一つの方策であると考えられる。

一方で、小学校教諭はすべての教科を基本的に一人で指導する必要があるため、体育科教育を負担に感じている教諭も存在する。文部科学省は小学校においてもすべての教科を一人で担当するクラス担任制でなく、それぞれの教科を別の教諭が担当する教科担任制の導入を検討しており[文部科学省, 2016]、体育科教育においても教科担当制が導入されれば、専門性を活かした指導を行うことにより、体育科教育の充実が図れることとなると考えられる。

次に体育科教育の意識による分類における児童の運動器に関連した小学校教諭の意識の結果で有意差がみられた事項（運動実施の二極化、骨折の増加）について考察する。

本調査において、体育科教育の意識についての分類において運動実施の二極化の進行と児童の骨折増加で上位群と下位群に有意差がみられた。このことから特に下位群においては、先述した運動実施の二極化が進行していることや骨折が増加している[Hagino H. et al, 2000 : 356-360][Khosla S. et al, 2003 : 1479-1485][鳥居, 2004 : 202-205]ことに代表される現代の子どもの身体的特徴を認識せずに体育科教育を実施している可能性が考えられる。

児童にとって、体育科教育は運動時間を確保し、身体を作り、スポーツに親しみ、将来に向けた豊かなスポーツライフの基礎を作る貴重な時間である。つまり、学習指導要領の体育科の目標にある「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成する」ために、小学校教諭は体育科教育において、運動実施の二極化が進行していることや現在の児童の身体的特徴を理解することが重要である。その上で、体育の授業を実施することにより、学習指導要領に示されている体育科の目標に対して何をなすべきかが明確になり、充実した体育科教育を実施できると考えられる。

## 6. 結語

以上の結果より、児童の運動実施の二極化が進行していることおよび身体活動を中心とした健康に関する認識を高めることにより、自身および児童への健康観を形成することが重要であると考えられる。それによって、新たな学習指導要領の体育科の目標が明確となり、充実した体育科教育を実施できると考えられる。

註（1）平成31年における教職課程再課程認定においては、すべての学校種免許において教職科目のなかに学校安全に関する科目が入ることとなっている。しかし、学校保健については、養護教諭および保健体育科教諭のみである。

## 引用文献

- Hagino H, Yamamoto K, Ohshiro H et al (2000) : Increasing incidence of distal radius fractures in Japanese children and adolescents. J Orthop Sci, 5, 356-360
- 雪吹誠, 枝元香菜子 (2018) : 初等体育科指導法の理解度と運動・スポーツの得意不得意及び好き嫌いとの関係, 高等教育研究, 24 : 101-109
- 石川拓次 (2018) : 養護教諭および運動系部活動顧問における運動器疾患の意識についての一考察, 東海学校保健研究, 42(1) : 17-28
- Khosla S, Melton LJ, Dekutoski MB, et al (2003) : Incidence of childhood distal forearm fractures over 30 years. JAMA, 290, 1479-1485
- 文部科学省 (2017) : 小学校学習指導要領 第2章 各教科 第9節 体育 : 142-155
- 文部科学省 (2014) : 学校保健安全法施行規則の一部改正等について (通知) [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/01/1383847\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/___icsFiles/afieldfile/2017/05/01/1383847_01.pdf) (最終アクセス2019.12.27)
- 文部科学省 (2015) : 2. 新しい学習指導要領等を目指す姿 (1) 新しい学習指導要領等の在り方について 学習プロセス等の重要性を踏まえた検討, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm) (最終アクセス2019.12.27)
- 文部科学省 (2016) : 「社会に開かれた教育課程」の視点に立った、小学校の教育課程の改善発達の段階 (低学年・中学年・高学年) を踏まえた学習・指導の在り方, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/attach/1367637.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/074/siryo/attach/1367637.htm) (最終アクセス2019.12.27)
- 日本臨床スポーツ医学会編 (2008) : 臨床スポーツ医学用語集, 全日本病院出版会, 東京
- 西嶋尚彦 (2018) : 全国体力・運動能力, 運動習慣等に関する調査が取り組む二極化解消, 子どもの発育発達, 16(1) : 4-10,
- 清水清志, 塩原茂, 金子伊樹ほか (2019) : 小学校教諭の器械運動指導に関する意識について～群馬県A市小学校教諭に対する意識調査から～, 群馬大学教育実践研究, 36 : 107-116
- スポーツ庁 (2016) : 平成28年度体力・運動能力, 運動習慣等調査 第3章 I. 小学校児童の調査結果, [https://www.mext.go.jp/prev\\_sports/comp/b\\_menu/other/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/12/15/1380539\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/___icsFiles/afieldfile/2016/12/15/1380539_03.pdf) (最終アクセス2019.12.28)
- 鳥居俊 (2004) : 子どもの骨折は増加しているか～過去30年間の学校管理下の災害基本調査から～, 子どもと発育発達, 2(3), 202-205
- 津川恵子, 長升登志江, 朝井均ほか (2008) : 中学生における生活習慣に関する調査研究--腹囲, 肥満度, 体脂肪率等との関連性について, 大阪教育大学紀要 3 自然科学・応用科学 56(2) : 9-25
- 津島愛子, 三村由香里, 本田浩江ほか (2017) : 小学生における運動器検診の結果と課題, 研究集録 (164) : 41-47
- 山田浩平, 河本祐佳 (2014) : 小学校教員志望者と養護教諭志望者の保健学習に対する意識の比較, 愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 4 : 105-113
- 山平トモ, 古川京子 (1978) : 一般教諭の保健業務参加状態--養護教諭の側からみた一般

教諭の学校保健に対する理解・協力度を中心にして，千葉大学教育学部紀要，27，21：217-233，

# A Consideration for Consciousness of Physical Education in Elementary School Teachers

Takuji ISHIKAWA

## Summary

The purpose of this study was to consider consciousness of physical education in an elementary school teacher about the state of the substantiality of future's physical education by comparing with knowledge related to locomotor system and consciousness to child's lifestyle. Subjects were 714 elementary school teachers in A prefecture. Self-description questionnaires were mailed to them. The number of responses (response rate) was 231 (31.91%). Questionnaire items were about their consciousness of physical education, recognition of words and phrases of locomotion system, conscious of children's lifestyles, and exercise habits of teachers themselves. 3 point to 5 point rating scales were applied to single-answer questions. It was classified into top-group and sub-group by the average whose score an answer of consciousness of physical education. It was compared and examined. Student t-test and Mann-Whitney's U test were applied to analysis of this data. The significant level was set to less than 5 %.

The top-group scored the high points more than a sub-group about recognition of terminology about locomotor system ( $p < 0.001$ ). The top-group recognized more terminologies about locomotor systems ( $p < 0.05-0.001$ ). The top-group was more conscious than the one of a sub-group by a question of "with a lot of children who break their bone", "polarization of the child who exercises and the child who doesn't do stood out", "with a lot of children who don't have much sleeping hours", and "with a lot of children who don't have breakfast" about child's lifestyle ( $p < 0.05-0.001$ ).

The result of the survey indicated that it's necessary that teachers form the idea of health about themselves and the children by understanding locomotor system and understanding of children's health with a focus on exercise, in order to improve one's physical education classes.

Key word course of study at elementary school Physical Education  
Locomotor System Lifestyle Idea of Health